

はじめまして。TKです。昭和十二年一月生まれの八十七歳です。生まれたのは北海道
北海道の紋別郡上湧別町屯田市街（もんべつぐん かみゆうべつちよう とんでんしがい）
というところです。



【父は郵便局長】

父は●●といひます。町の郵便局長だったの。けっこうな名士だったんですよ。母は●●といひ名前でした。明治の人だから、子についていなかったと思うの。

きょうだいは五人。長女のわたしが一番上。下に、次女、長男、三女、四女の五人。弟ひとり男の子なの。わたしたちきょうだいは、五人ともまだ誰も亡くなっていないの。すごいでしょう。

父は町の名士で教育熱心だったから、わたしたちきょうだいは五人とも大学を出して貰ったの。

五人きょうだいの長女だと家の手伝いは大変だったかって？ いえいえ、うちにはばあやがいて、そのばあやが何でもやってくれたから家の手伝いなんてしなかったわ。わたしはお嬢さんで育ったのよ。ふふふ。

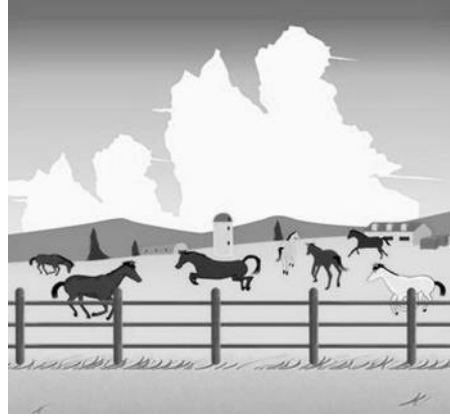
そのばあやはね、母が実家から連れてきた人だったの。母は大きな牧場の娘だったのね。そこで使っていた人を母がお嫁に来る時に母の実家が付けてよこしたの。

【母の実家は大きな牧場―楽しかった子ども時代―】

母の実家は海沿いであってね、そこには馬車や馬櫓（ばそり）で行くのよ。わたしたちきょうだいが、母の実家に行きたいというを迎えに来てくれるの。

母の実家の敷地の中に海岸があつてね、自分たちで勝手にそこまで下りて行って、泳いだり、浜で遊んだりしたの。そりゃあ楽しかった。そう、オホーツク海よ。

オホーツクの海の水は冷たくなかったかって？ 夏はそうでもなかったよ。綺麗な海でね。いいところだったね。



母の実家の牧場にはね、牛もいたけど馬がたくさんいたのよ。わたしたちきょうだいは、それぞれ自分の乗る馬を決めていたんですよ。勝手にね。鞍(くら)も筵(むしろ)も付いていない裸馬に乗っていたの。鞍や筵があると、高い馬の背がさらに高くなるからね。だから裸馬に乗っていたの。小さい時からいきなり大きな馬に乗っていましたよ。でもち

つとも怖くはなかったね。

自分の馬は自分で世話をするの。だから馬もわたしの言うことをよく聞いてくれたわね。

そうそう、ある時ね、馬が草を食べるために下を向いたの。そうしたらすうくとわたしが落

ちてしまったのよ。でも馬は決してわたしを踏まないの。馬って本当にお利口よ。



冬になるとね、オホーツク海には流水がギシギシ音をたててやってくるの。寒いなんのつて、鼻をすすると、鼻の中がくっついてしまいうくらい。

紋別はね、雪も降りますよ。吹雪になることもあったしね。雪が降ったら裏山でスキーをするの。冬の遊びってスキーしかないものね。

母の実家からの迎えはね、夏は馬車なんだけど、冬になると馬櫓で来てくれたの。これが楽しいのよ。馬櫓に囲いをして、中にお炬燵を作って、お布団を入れて。だから外はものすごく寒いのに、中はとってもあったかいの。

それに上湧別はりんごがよく採れるのね。りんごも馬櫓に積んで持っていくと、母の実家

の人たちはとても喜ぶの。母の実家では、りんごなんて作っていないからね。

えっ、上紋別の実家ではりんごも栽培していたかって？ いいえ、そうではないの。

わたしの母はいい人でね、誰とでもすぐに仲良くできるの。母は、りんご農家の人と知り合いになって、その人たちがお酒好きだったから、いっぱいお酒をご馳走して楽しく持て成すのよ。だからすっかり仲良くなったりりんご農家さんをお願いすればすぐにりんごを持ってきてくれたの。当時はりんごって高級品だったのよ。

そうそう、母の実家といえばね、母は九人きょうだいなのよ。九人の名前にはみな数字がはいっているの。母は八番目だから●●。長男は●●、この人も郵便局長でね、自分で郵便局を持っていたわ。九番目の弟は●●。そんな具合だから、子どもが九人いても親はこの子は何番目ってすぐわかるわね。末娘の母はきょうだいからもお姫様のように大事にされたの。

上湧別の実家に時々母のきょうだいが遊びに来るの。みんなお酒が大好きだからすぐに宴

会になるんだけど、父は小さくなっていて気の毒だった。「お父さん、ここはお父さんの家なんだから、そんなに遠慮しなくてもいいんじゃない」って言ったんだけどね。父はいつも居心地が悪そうだったわ。ふふふふ。

【戦中・戦後のこと】

戦争中のこと？ そうだねえ。札幌にアメリカの飛行機が来ると、紋別でも警報が鳴るのよ。でも札幌から紋別は遠いでしょう。わたしたちの住んでいるところなんて飛行機は、ぜんぜん飛んでこないの。それでも札幌に空襲があるたびにわたしたちも防空壕に避難していたわ。

食料？ お米は家に水田があったから、ぜんぜん困らなかつたし、母の実家は農地も持っていたから、野菜でも何でも分けて貰えたわね。ひもじい思いはしなかつたね。

でもね、わたしたちは幸せだったけれど、親たちは苦勞したと思うわ。戦後になって、制度がずいぶん変わってしまったからね。農地改革（註1）があつたから、土地持ちは苦勞したそうよ。

だけどね、町からそれほど離れていないところ、そうね、車で三十分から一時間ぐらいのところを実家は五鹿山（ごかさん）（註2）っていう山を持っていたのよ。五鹿山って鹿が五頭いたとかっていうところから父が付けた名前だけど、いい山でね。そんな険しい山ではないのよ。景色のいいところでね、そこからは、オホーツクの海やサロマ湖が見えるの。実家はその山も持っていて、燃料用木材を大量に売っていたの。そんなのもあつたから、父が郵便局を退職してからも生活には困らなかつたんだよ。だからきょうだい全員を大学に行かせることができたの。そういう家だったのよ。

教科書を墨で消したかつて？（墨塗り教科書 註3）消したわよ。言葉とか使えない箇所

をみんな墨で消して。なんかねえ。そんなこともあったわね。

小学校の時は別学だったけど、中学から共学になったのよ。だからって別にどうってこともないんだけどね。

中学生になって、バレー（ボール）やバスケット（ボール）なんかしていたわね。学校にプールもあってね、みんな泳いだわ。クロールや平泳ぎをやらされて大会にも出たのよ。

【大学進学】

高校は道立の学校で汽車通学でね。そこから大学に進学したの。わたしは運動が得意だったから二階堂（現日本女子体育大学）（註4）に行ったの。

二階堂は、確か今は名前が変わったんじゃないかな。場所もわたしたちの時は世田谷の松原というところだったけど、今は別な場所に移ったはずよ。



現在の日本女子体育大学

わたしはね、走ることは大したことがないんだけど、バレーボールやバスケットボールとか、そう、球技が得意だったのね。そんな訳で同級生が二階堂に行くっていう話を聞いた時、わたしの方がその人よりずっと運動ができたから、「えっ、わたしだって…」という気になって「お母さん、〇〇さんが東京の二階堂に行くんだって。知っている？ 体育の学校、保健体育の大学なんだけど」って話したら、母はすぐに「ちようどいい。あんた何にも勉強してないんだから、あんたもそこに行きなさい」って言ったのよ。そんな感じで二階堂に行くことになったの。はははは。

父は仙台一中を出て、代々郵便局長の家だったから北海道に帰って郵便局を継いだのね。だからうちは経済的に余裕があったし、父も運動が好きで得意だったの。母は大きな牧場の娘でしょう。そんなわけで二人ともわたしが東京の体育大学に進学することには理解があっ

たのね。その頃進学する人が少なかったのに、東京の大学への進学を許してくれたんだから、わたしは恵まれていたんだね。

北海道からはるばる入学試験を受けに東京に行ったの。試験はペーパーテストと実技だったわね。無事合格して嬉しかったわ。

上京する時は、石炭を炊いて走る汽車で行ったの。そうそう、蒸気機関車ね。それはもう、大変だったわ。顔も鼻の穴も真っ黒になるのよ。窓を開けると、煙が入ってくるの。乗っている人はみんな煤で顔が真っ黒！ はははは。

汽車の中には石炭ストーブがあつてね、自分たちで火を焚くのよ。列車に乗っている車掌さんは別の仕事があつたから、乗客のうちで若い男の人たちが代わる代わるストーブの火が消えないように石炭をくべてね。だから冬でもちっとも寒くなかったのよ。

東京までは長旅だったわ。まず、旭川で一泊して、札幌に行く

の。札幌から函館に行って、連絡船に乗ってその中で一泊して青森に着いて、そこに上野行きの汽車が待っているのよ。汽車の中でも一泊したし、結局、上野まで三泊四日ぐらかかったんじゃないかしら。そういう時代だったのよ。今の若い人には想像もつかないでしょうね。はははは。

ひとりで長旅をして怖くなかったかって？ ぜんぜん。そこに行かなければならないという目標があったから、まわりのことなんか関係なかったわ。

そうそう、わたしとすぐ下の妹は年子なのね。その妹も次の年に二階堂に入学したのよ。わたしの住む町はそんなに大きくないでしょう。知り合いが町中にいるわけ。その知り合いが集まって壮行会をしてくれたの。入学のために出発した日には、町の人達が集まってく



れてね、駅のホームでバンザイとかしてくれてね。はははは。昔はそういうことがよくあったのよ。

上湧別に帰るとね、今でも、同級生が「●●が帰ってきた」って集まってくれるの。すぐに酒盛りになるんだけど、わたしはお酒を飲まないから「そんな宴会、楽しくない！」って怒るのよ。それでも「おい、お前、顔を出せや」って呼びに来るの。「俺たちの顔をつぶさんでくれよ！」ってね。みんな幼馴染ね。帰るとみんな喜んで、わくわくと声をかけて集まってくれたものよ。はははは。でも、今じゃその人たちもずいぶん亡くなったんじゃないかしら。ここ何年も帰っていないわね。なんか遠くまで行くのが億劫になったわ。昔はアメリカだつてへっちらで行ったのにね。

東京での生活？ わたしはね、北海道弁は使っていなかったの。共通語を話していたから、言葉には困らなかったよ。ただ、食べ物なんかずいぶん違っていたねえ。

北海道では、地元の漁師さんから新鮮なお魚を手に入れて、それを刺身や焼き魚にして食べていたのよ。でも、東京では北海道ほど魚の鮮度が良くないでしょう。だから生姜を入れて甘辛く煮つけるしかなかったわね。

そうそう、世田谷の松原は銀座や上野のような都会都会した賑やかなところは違って、のんびりしていたから、北海道から来たわたしにはちよつど良かったね。

それにね、わたしの母は旭川の女学校を出てから東京で生活していたことがあつたし、母のきょうだいや親戚が東京にいたから何の心配もなかったの。

母の兄の●●伯父さんも東京にいたの。その人は学校の先生をしていたの。それも教職課程を取ろうと思つていたわたしには好都合だったの。いい伯父さんだったわ。

【体育の先生になる】

体育の教員免許をとるために母校である道立高校に教育実習に行ったの。わたし早生まれだから母校の高校生とそんなに歳が違わないのにさ、朝は「先生おはようございます」、帰りは「先生さようなら」って丁寧に挨拶されるの。「先生」って言われると、もう恥ずかしかったねえ。はははは。

その頃母校には、わたしが高校生の時に教えて下さった先生方がたくさんいて、わたしのことを、「おい。●●！」とか呼び捨てでね。生徒の前であればないわよ。「先生、生徒の前では、『おい、●●、何やってんだ！』とか言うのを止めて下さい」って言ったわよ。はははは。だから、二階堂を卒業して母校の道立高校に赴任することになったんだけど、なんか嫌だなあと思ったの。

でも親から「来てほしいと言われている時が花だから行かなければダメだ」って諭されてね。そう言われたらしかたがないよね。

【●●さんとの結婚】

結婚相手は●●。滋賀県近江八幡の人よ。親が早くに亡くなって、おばあさんとおじさん、おばさんに育てられたの。そこで教育してもらって、そこから離れたんだけど、「北海道に行ってみるか」ってわたしの実家のある上湧別町に来たのね。

わたしの父は郵便局の局長だったけど山とか土地とかいろんなものを持っていたから、●●さんはその関係の仕事をしていたの。それでわたしたちは知り合ったの。わたしより親が●●さんを気に入って、●●さんを婿にしたかったのね。

結婚が決まって、●●さんの田舎、近江八幡へ挨拶に行つたの。近江八幡ってところは厳しいところよ。家柄とかしきたりとかにうるさいの。まあ、京都に近いからなんだろうね。でも、わたしは家柄を言われてもぜんぜん困らなかったね。だから平気な顔をしていたよ。

はははは。

●●さんは、そういう面倒くさいことにはこだわらない人でね。自分の思う通りにやる人だった。他人なんか関係ないってね。ほほほほ。だからわたしはとても助かった。おかげで別れずに済んだのよ。ほほほほ。

母も近江八幡へ北海道からお土産を持って挨拶に行ったの。そしたら、近江八幡の家の人も歓迎してくれて、両家はすっかり仲が良くなって交流ができたの。そのあと、おじさんとおばさんや親戚の人も北海道に来たのよ。●●さんがしつかり段取りしてね。おじさんもおばさんもわたしの実家を見て安心したようで、喜んで近江八幡に帰って行ったわ。

わたしの親と●●さんはとても仲が良くってね。「●●、●●」って我が子よりかわいがっていたの。とくに母とはウマが合ったわね。どこかに行くときは必ず●●さんが連れて行っていた。たとえば、妹の結婚式の時も母を飛行機に乗せて結婚式場まで連れて行ったのよ。

わたしが、「あなた、やりすぎだよ」って言ったたら、「お母さんひとりで行くのは大変でしょう」って言っていた。だからわたしは「ああ、そうだね。それじゃあお願いするね」ってね。はははは。父は仕事で上湧別から離れられなかったしね。●●さんが一緒だと母も心強かったと思うよ。

二人が出かけるとね、二人ともわたしに気を遣って、別々にお土産を買ってきたわね。だからわたしは母にね、「お母さん、わたしはもうお土産いらさないから、他のきょうだいに買ってきてね」って言ったこともあったわ。●●さんからのお土産で十分だったから。

わたしの父が町の名士だったから、●●さんも仕事をやりやすかったんじゃないかな。

その父は郵便局長を定年で辞めて、いろいろ事業を始めたの。●●さんの家は近江八幡の商売人だったから、商売のことは郵便局長上がりの父よりわかっていたと思う。わたしもね、

●●さんに「ここは田舎で他所に出たことがない人と仕事をするんだから、その人の身にな

ってやってあげないとね」といつも言っていたわね。

●●さんは本当に頭のいい人だった。だからわたしの父も母も●●さんのことを大好きだったし、頼りにしていたし、よく面倒も見ていたわね。特に母は●●さんが「お母さん、どこどこに行くよ」と声をかけると「待って●●、わたしも行くから」って出かける用意をするの。はははは。本当に仲良しだった。

●●さんは早くに両親を亡くしておばあさんに育てられていたから、わたしの親を本当の親のように思ってくれていたんだねえ。

わたしはね、●●さんと結婚したことが一番の親孝行だと思っているよ。

【東京へ】

子ども？ ○○という娘がいるの。孫もいるのよ。

〇〇は今、神戸にいて時々来てくれるし、孫はね、東京に住んでいてね、ここから一時間ぐらいのところにおいて、よく顔を見せてくれるの。お菓子の方に勤めていてね、そこはけっこう有名などころらしいわ。駅ビルなんかにも出店しているらしいのよ。

〇〇は生まれた時、色が白くてね、それはもう本当に綺麗な赤ちゃんだったの。●●さんに「名前をどうする」って相談したら、「そうだなあ」って考えてね。「ぴったりの名前だね」って二人で決めたの。

東京に来たのは〇〇が中学生になる頃かな。小学校は上湧別だったから、ちょうど切れ目の時に来たのよ。わたしの実家の●●産業の仕事のために東京に来たの。

●●産業が一番下の妹が継いで、今では妹の長女が社長なのよ。弟も湧別町（註6）にいるの。東京にはわたしと妹ふたり、そう、長女次女三女がいるのね。妹たち二人は●●産業とは関係ないの。

うちのきょうだいはね、実家や成功した妹に対してしゃしゃり出て、あーだこーだ言う人は誰もいないの。わたしが一番上でそういうことを一切しないから下のきょうだいたちもしないのね。だから、実家を継いだ妹はやり易いと思うよ。もし、羨ましがってそんなことをしたら、長女のわたしが怒るからね。はははは。

ただ、一番下の妹には、「年末でもいいし、お盆でもいいからみんなに小遣いをあげるといいね」とは言っているの。

【ボウリングは大得意】

ボウリングは北海道にいた頃から始めたの。三十代前半だったかねえ。

ボウリングが盛んだった頃、わたしもボウリングにはまっていたね。そう、須田開代子さんたちが活躍していた頃ね。(註5)。

わたしはけっこうボウリングが強かったんだよ。あの頃夢中だったわね。アメリカにも行ったの。

アメリカは楽しかったですよ。日本は戦争に負けていたからね。「アメリカ人になんか負けるもんか！」ってやっていたの。わたしは負けたことがなかった。他の日本人は勝ったり、負けたりしていたけど、全体的にはわたしたち日本人の方が強かったわね。「負けるもんか」という気持ちがあったからね。

ただ、わたしはアメリカに団体で行くのはそんなに好きではなかったの。だから友達と二人でアメリカに行ったの。その友達は基地に勤めているボウリング好きな女性でね、英語ができるからこの人を誘って行ったのよ。だから、アメリカでは何も困らなかったね。

アメリカでの食事？ 別にハンバーガーばかり食べていたわけではなかったわよ。広いショッピングモールに行っておいしそうなものを買ってきたの。料理とかしないで、買って

きたものをそのまま食べていたわ。

●●さんには「○○さん（基地に勤めていたボウリング友達）がアメリカに行くって言っているからわたしも一緒に行きたいの。ごめんね」って言ったの。そうすると●●さんは「しようがないなあ」とか、「またかあ」って言いながらもお金を出してくれたの。ありがたいわよね。



ただね、実は●●さんはお酒を呑むことが大好きなの。だから口うるさいわたしがいないと羽を伸ばせるのよ。わたしはぜんぜんお酒が呑めないから、●●さんにあんまりお酒は呑ませなかった。そんなわけで、わたしが留守

だと思いつきり呑めるのよ。

わたしがいっぱいお金を使うから●●さんがよく頑張って働いてくれたの。はははは。

●●さんはボウリングを本気でやったら上手だと思う。でも「そんなのくだらない」って言ってやらなかった。わたしの死んだ●●さんはよく働いたわね、命短しよ。亡くなったのは六十代よ。若かったわよね。●●さんは結婚前に結核に罹ったの。それが、歳をとるとまた出てくるのよね。最期は結核で亡くなったようなものよ。

こうやって人生を振り返ってみると人生って川の流れのようだね。いろんなことがあってここまで来たんだね。わたしは遊んでばかりだったけどね。ふふふ。

両親には感謝しかないね。本当にありがたかった。両親のこといっぱい思い出したわ。

【若い人たちへのメッセージ】

そうねえ。若い人には、正直に真面目に働いたらいいと伝えたいわね。そうして努力しているとちゃんと自分に返ってくるものよ。

ただねえ、今の若い人に通じるかしら。最近はお金さえあつたら何でもできるって考える人が多くなっているでしょう。

でもね、正直に真面目に働くっていうのが一番なのよ。

えっ、麻雀のメンバーが足りないの？ いいわよ。わたしやるわよ。

わたしはボウリングよりも麻雀の方が上手いのよ。だって子どもの頃からずっとやってい
るんですもの。わたしは遊ぶのが上手なの。ふふふふ。

では、またお話ししましょうね。

(令和六年九月二日、三十日、十月二十八日、於ソラノイロ芝公園)

註1 農地改革法

一九四六年（昭和二十一年）十月に第二次農地改革法が成立した。正確には農地調整法（一九三八年）の改正と自作農創設特別措置法（一九四六年）および関連法の特別会計法などである。その結果、これまで地主が所有し小作人（農村奉公人あるいは地主使用人ともよばれる）から地代を取得していた耕作地は法二十三条の規定に基づき交換され、いったん農水省が土地所有者として登記されてから小作人に分割されるなどした。

この法律の下、以下の農地は政府が強制的に安値で買い上げ、実際に耕作していた小作人に売り渡された。

- ・不在地主の耕作地のすべて
- ・在村地主の小作地のうち、北海道では四町歩、都府県では一町歩を超える全耕作地
- ・所有地の合計が北海道で十二町歩、都府県で三町歩を超える場合の小作地 等

また、小作料の物納が禁止され、農地の移動には農地委員会の承認が必要とされた。

農地の買収・譲渡は一九四七年三月三十一日に開始され、一九五〇年七月まで十六回にわたって行われた。その結果、百九十三万町歩の農地が二百三十七万人の地主から買収され、四百七十五万人の小作人に売り渡された。しかも、当時の急激なインフレーションと相まって、農民（元小作人）が支払う土地代金と元地主に支払われる買上金はその価値が大幅に下落し、実質的にはタダ同然で譲渡されたに等しかった。

この改革では、水田、畑作地の解放は実施されたが、林野解放は行われなかった。

註2 五鹿山

北海道紋別郡湧別町北兵村（きたへいそん）にあり、現在はキャンプ場、スキー場、公園などが整備されている。

註3 墨塗り教科書

教科書の記述に墨を塗らせて抹消したもの。

日本が第二次世界大戦で敗戦した直後に、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）が不適切と判断したものは書き換えられるか、墨塗りされた。教科によつては、ほぼ全行に抹消線が引かれたものもあった。当時の国民学校（現：小学校・中学校）では、当時使われた教科書のうち、国家主義や戦意を鼓舞する文章の箇所については「墨汁で塗りつぶして読めないように」という進駐軍の指示（命令）が出されたためである。また、児童が教員の指示に従い塗りつぶしを行った。

註4 二階堂（現日本女子体育大学）

一九二二年に二階堂トクヨにより二階堂体操塾開塾。一九二四年関東大震災により、東京府多摩郡代々幡町（現在の東京都渋谷区）から荏原郡松沢（現在の世田谷区松原）に移転。

一九五〇年日本女子体育短期大学開学（体育科、保育科）。一九六五年日本女子体育大学開学（体育学部体育学科）。一九八〇年法人本部を世田谷区松原から同区北烏山に移転。

註5 ボウリングブーム

一九七〇年（昭和四五年）前後には、須田開代子と中山律子に代表されるスター・プレイヤーの出現などがきっかけとなって、ボウリング場が数百メートルごとに立ち並ぶほどの一大ブームが到来した。日本国内のボウリング場は一九七二年（昭和四七年）時点で三千六百九十七箇所を数えた。

その手軽さとルールの簡明さゆえに、国民に馴染み深いスポーツの一つであったが、ブームが過ぎると集客力も減衰して施設は激減していった。ボウリング場も一九八〇年代からはアーケードゲーム（業務用ゲーム機）を併設し総合娯楽施設として構えていたことが多かった。遊びの多様化によるボウリング競技者人口の減少に加え、先のブーム時に建てられた施

設の老朽化が進んで耐震基準を満たさなくなったことが大きく響いて、次々に廃業していった。

註6 湧別町

もともと湧別川の川筋全域が「(旧)湧別村」となっていたが、一九一〇年(明治四三年)に(旧)湧別村を上湧別村・下湧別村に分割、一九五三年(昭和二八年)にそれぞれ同時に町政施行した際に、下湧別村については下をとって湧別町となり、このため地名としての「湧別」は長らく河口付近の一自治体を指す名称となった。

なお、上湧別村のうちさらに上流域が遠軽村(その後さらに分村したのち再度合併して現在の遠軽町となる)として一九一九年(大正八年)に分離しているため、「上湧別」は「上」を冠するにも関わらず湧別川中下流域の地名となっていた。

二〇〇九年(平成二一年)に上湧別町と(旧)湧別町の新設合併が行われることとなり、

その事前協議の中で「歴史的背景」から町名は「湧別町」となり、現行の（新）湧別町が発足した。